

小野さんが教えてくれたこと

井 上 勝

『紀要』原稿の締め切りが2月27日から3月13日への変更が報告された。私は不可思議な巡り合わせに驚いた。1年前の3月13日は電話で小野先生の訃報に接した日だったからである。小野先生の命日に合わせて締め切り日が再設定されたわけではなさそうだった。だからこそ、私は驚いた。そして「私が締め切りを延ばしてやったのだから、13日までにはちゃんと書き上げてくれよ。いいね、13日だよ」という小野先生の声が聞えた。

1年前の3月13日に私は2度電話を貰った。1度目の電話は小野先生が危篤であると伝えてきた。それ程の衝撃ではなかった。まだ亡くなったわけではない、と受け取っていたからだろうと思う。2度目の電話は午後4時15分に小野先生が亡くなられたという知らせだった。2度目の電話を受けたときも割りと冷静だったような気がする。そのとき、「[がん以外は健康]な 小野 功生」と言って、自らを励ましていた小野先生は「ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏」を完成させたのだろうか、と案じるだけの余裕さえあった。しかしその後暫くは自分が何を考えていたのかいまだにわからない。多分心に空白ができていたのだろうと思う。大きな衝撃はそんな作用をするのだろう。

暫くして、私は小野先生が1度目の入院治療から復帰されたときのことを思い出していた。

左頸部の瘤は消えていた。髪は短かった。しかし生え揃っていた。小野先生は「敵」との戦いに勝った。小野先生に会って、誰もがそう信じただろうと思う。私もそう信じた1人だった。その日、私は逸る気持ちを押さえて、小野先生の研究室へ入り込んだ。そして「最近の鬢の出来栄は中々のものだね。そんなに短い髪を、まるで地毛のようにしてしまうんだ」と先生をからかった。先生ははにかみ気味に、しかし目を輝かせて、「引っ張ってみる？」と私に頭を差し出した。私は約束通り髪を引っ張り、先生は「痛いです」と小声を漏らした。「本当に小野さんの髪の手毛だ」と私は、笑いながら、言った。私が引っ張ったのは小野先生

の髪だった。

小野先生に約束させていた。髪はまた生え揃うのだから、そのときには引っ張らせて貰うからと。それがそのときだった。小野先生は髪を引っ張られて、「痛い」と口にしながらも、屈託のない少年が浮かべるような微笑を浮かべた。その表情に先生自身が回復しつつあると信じていると私は感じた。何よりもまず本人が回復を信じるのが最高の治療薬だろう。私は小野先生の回復を信じた。私が小野先生に髪の毛が生え揃ったら、引っ張らせて欲しいとお願いしたのは、私が7年前にも同じことをしていたからだった。

2002年5月にバリー・ハナ氏の髪を引っ張っていた。その時は「それ、自分の髪？」と訊くと同時に引っ張ったのだった。ハナ氏のツルツル頭が元の頭に戻っていたからだった。私は何とも無礼だった。ハナ氏は嫌な顔をするどころか、悪戯小僧を眺めやる目で私を見て、にこっと、笑った。

ハナ氏は白血病で、2000年3月末には危篤状態に陥っていたほどだった。近親者全員が呼び集められた。しかし彼は危機を乗り越えた。危機を乗り越えたばかりか、翌2001年に彼は *Yonder Stands Your Orphan* を出版した。

ところが2年後の2002年5月、ハナ氏も私もミシシッピ州ヤズー市で開催された“Remembering Willie, 2002”で話すことになっていたけれども、ハナ氏は欠席した。私はツルツル頭のハナ氏を思い浮かべていた。私がハナ氏の欠席に気がかけていることに気づいたからか、“Remembering Willie, 2002”に参加していたオクスフォード市長は帰国直前の私をオクスフォードへ拉致し、ハナ氏に会わせてくれた。私は2000年に見ていたツルツル頭ではなく、床屋へさえ行っていたというハナ氏に会うことができ、驚きと言うよりは感動のあまり、彼の髪を引っ張ったのだった。おそらく私は目を輝かせていたものと思う。

私は小野先生に何度かハナ氏のことを話した。ハナ氏が繰り返し治療を受けた後白血病を乗り越え、小説を出版されもしたことを話した。ハナ氏が私には小野先生と同じような病と同じように闘って、遂には打ち勝った具体例だったからである。私が、約束であったとはいえ、無礼にも小野先生の髪を引っ張ったのは、回復に対するがさつな私の喜びの表現であった。先生に「痛いです」と言わせておきながら、謝りもせず、「本当に小野さんの髪の毛だ」となおも笑ったのは私の乱暴な回復祝いだった。短かったとはいえ、小野先生には立派な地毛があった。

髪が生え揃った頭は回復に向かっていることの証であった。

しかしほぼ2ヶ月に及ぶ入院生活は、そしてそれが大きな病との闘いであったばかりに、小野先生の体力をも確実に低下させていた。駅から大学までのなだらかな坂でさえなかなかきつく、休みを入れて「登っている」と小野先生は漏らしておられた。それでも、小野先生は、務めて私共に unnecessaryな心配を掛けまいとして、『がん以外は健康』であると言っておられた。それが小野先生の配慮だった。今になれば、そのような状態にありながら、周囲への配慮を決して怠らなかった先生が恐ろしくも思える。もっと我がままに振舞ってもいいはずだった。

先生は検査の結果から再入院するか、通院治療にするか、家族のおられる鳴門で入院治療にするかの選択を迫られていた。最終的に先生は徳島での入院を選ばれた。入院しなければならないのであれば、家族の元での入院の方がはるかにいいに決まっている。それは先生自身も納得していることであった。しかし先生はこう漏らされた、「鳴門で入院すれば、病院のベッドで死を待つだけになりそうな気がする」。「病院のベッドで死を待つだけ」と先生が言っているのを私はしっかりと聞いていた。私は間髪を入れずに、何かを言うべきだっただろう。小野先生を怒鳴りつけるべきだったかもしれない。何という、気弱な、愚かな、ことを言っているのだ、と。私は即座に反応することができなかったことを今でも後悔している。3月13日の電話での知らせよりもこのときの方が私にははるかに大きな衝撃だった。「病院のベッドで死を待つだけ」という言葉は鮮明に脳裏に焼きついている。

私たちがすべきことは先生を慰めることではなかっただろう。労わることでもなかっただろう。私たちがすべきことは先生が本当に必要とされているというメッセージを送り続けることだっただろう。そのメッセージは、体力が衰えていく中、なおも治療を続けなければならない身であることを知りながら、先生に具体的に仕事を割り振ることであった。「小野さんには大事な仕事がありますからね。取敢えず通院治療かな」と私は務めてぶっきらぼうに言った。それが精一杯の言葉だった。小野先生は「そうですね。まだご迷惑をお掛けすることになりますが、よろしくお願ひします」と言われた。「がん以外は健康な」先生は限られた体力を消耗しつつ、割り当てられた仕事を精力的にそして的確になされた。

ほぼその仕事が終わろうかという頃、先生は恐れていた「決断」をされた。鳴

門での入院を決められた。その仕事が終わるまで、先生は我慢に我慢を重ねておられたに違いない。しかし、そのことについて一切触れることはなかった。それが小野先生だった。そしてゼミ等の授業にどう対応すればいいのか、授業に出ている学生にどのように「詫びて」いいのか、悩んでおられることを打ち明けられた。その悩みは大きな決断をして入院をしなければならない小野先生ではなく、入院する必要のない私たちがすべきことであった。小野先生に不要な悩みを抱えさせないことが私たち同僚の務めであるはずだった。2007年度の授業については井出新先生、藤本朝巳先生、ケイレブ・プリチャード先生が代講を申し出られた。竹野一雄先生が半期だけ非常勤で来て下さることになった。2008年度に予定されている科目についても、科目によってはデイヴィッド・バーレイ先生、向井秀忠先生が引き受けてくださることになった。しかし何よりも大きなことは学生たちが代講を認めてくれたことだった。私は学生に小野先生の心情を改めて伝えるとともに、そのような措置を取らざるを得なかったことを説明し、詫びた。私は小野先生のためにも学生たちに感謝しなければならない。

徳島へ帰られてからの先生の病状は一進一退を繰り返すのみのようであった。しかし、もう先生から「がん以外は健康な」という言葉は消えていた。それどころか、もはや「がん」に完全に身体を害され、亡くなる2ヶ月程前には前倒して「自家移植」をせざるを得なくなり、その結果、「1月20日から1月31日あるいは2月1日頃までの2週間は、超大量化学療法による前処置の結果、私のなかでは二度と語ることも、思い出すことも今はしたくない空白の二週間と呼ぶべき苦しさでした。しかしそれもなんとか乗り切り、白血球数も徐々に上昇、今日の採決結果では、まだ生着とは言えませんが、だいぶ数値が改善しています。ようやく現実界に復帰、という感覚です。」という経験、更に亡くなる1ヶ月程前には「私は、ある意味ですでに死につつある人間なのですが、その中でも希望を失わずに、ひとつひとつの治療に一縷の希望をかけざるをえません」という事態になっていたのである。

しかし「二度と語ることも、思い出すことも今はしたくない空白の二週間」が終わろうかというまさにそのときに、先生に救いの手が差し伸べられていた。「福原記念英米文学研究助成」授与の知らせが届いていたのであった。それは「私としては、さらに生きる意志をかきたててくれる、ほんとうにうれしい決定でした」。

小野先生は「まだ生き続けているように」と声を掛けられたのです。「あなたはまだ必要な人なのだ」と。まったく健康だった小野先生が書いてこられたそれまでの著作に「がん以外は健康な」小野先生が治療のあいまにこつこつと、書き継いでいたものを加えた『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』の出版助成であった。残念ながら、小野先生が自著を手にもされることはない。

恩師である山形和美先生が出版の手筈を整えられ、亡くなられてからちょうど1年と1日後の明日3月14日、午後4時から出版記念会が開かれる。私は、病床にあったのみならず、苛酷な治療にも耐え、乗り越え、それでも「すでに死につつある人間」として我が身を省みるしかなかった中で、研究者としての生涯を全うされた小野先生に敬意を表し、改めてご冥福を祈るために出版記念会に出ようと思う。小野功生さん、『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』のご出版おめでとう。そして安らかに。